

いつでも茶道とともに

愛知県立豊田北高等学校二年（愛知県）

安藤 こはる

高校生になったら茶道部に入ろうと決めていた。日本文化が好きで、憧れの思いがあったからだ。初めて部活に参加した時、先輩方の美しいお点前やおいしいお茶に感動し、自分も先輩方のようになりたいと強く思った。

まずは道具の扱い方を覚え、割稽古から始まった。初めて触れる道具や難しい作法に、一体この作法にどんな意味があるのかと疑問に思うことも多かった。私は、同期の部員に遅れをとらぬよう、ただひたすらにお点前の順番や動作を間違えないことに必死だった。一方、新型コロナウイルスの影響で遅れた学習内容を取り戻そうと高速で進む授業により、目まぐるしい毎日を送っていた私にとって茶道は、心を落ちつかせ安らぎをもたらしてくれる唯一の時間でもあった。さらに、週ごとに変わる茶花や和菓子は季節の訪れを教えてくれ、先生がお話になる時節を表す美しい言葉はいつも新鮮で、毎回私に小さな感動や驚きを与えて

くれた。

二年生になり、自分が亭主としてお点前をする稽古が始まった。しかし、思うようにおいしいお茶を点てられずにいた。どうしたら上手に点てられるのだろうと悩んでいた頃、母が私のためにお茶碗や茶筌を用意してくれた。私専用の茶道具に心が躍り、さらに上達して美しいお点前を目指そうと熱意が湧いてきた。ゴールデンウィークは毎日家でお茶を点てた。時々家族にもお茶をふるまい一緒にお菓子を食べると、お茶がつかないでくれる家族と過ごす素敵な時間に、かけがえのないものを感じた。そして、かつて茶道を習っていた母や祖母がほめてくれたことが嬉しかった。

ゴールデンウィークが明け文化祭でのお茶会の稽古が始まった。毎日お点前の稽古と反省をくり返すうちに、少しずつ自分が憧れる所作に近づいていく手応えを感じた。それは作法の手順ばかり気にした初めの頃とは違い、流れるように手が動き、一つ一つの動作を丁寧に行うことに気を配れるようになった。先生から教わった洗練された無駄のない動きとはこのことだと実感した。そして静かな空気の中でのお点前は、心地良い緊張感をもたらし、茶道は自分と向きあい心を清める、自分のための時間だと教えてくれた。その後も文化祭の準備は進んだが、今年は新型コロナウイルス感染症対策として、換気、客席の間隔、お菓子に銘々皿を使うなど工夫し、いつにない配慮が必要とされた。

そして文化祭当日、「今日一日、お客様へのおもてなしの心を大切にしましょう。そしてお客様を心から楽しませましょう」先生がお話になったこの言葉が大きく心に響き、茶道で最も大切なものはこれだと再確認した。この特別な日のために用意する掛け軸やお花、歩き方から始まり指の先の仕草まで、一つ一つの動作に気を配ることは、全て相手を心からもてなし敬意を行動で表すためだと改めて気づいた。私はこの日、精一杯のおもてなしをすることを心がけ、丁寧にお茶を点てた。

私が茶道を始めて一年たった今思うこと。それは、私が踏み入れた茶道の世界は、古くから続く日本人の心そのものの、ということだ。茶道のおもてなしの精神は日本人が大切にしてきた人とのつながり方や相手を思いやる心に通じていたのだ。今日、新型コロナウイルスによって以前のようには茶会を開くことは難しくなった。茶会の開催の仕方のように時代の状況に合わせて変化してゆくものもあるが、茶道の根底にある思いやりの心は万古不易のものであり、これからも伝えていくべき心だと思う。私はそんな美しい心を教えてくれた茶道と出会えたことに喜びを感じている。これから先も新型コロナウイルスのように私の心を乱す出来事があるかもしれない。そんな時でも、茶道を心のよりどころにし、思いやりの心を大切にして豊かな心を育んでいきたい。